

1 はじめに

本学級の児童は、明るく元気いっぱい、何事にも一生懸命取り組み、毎週の図画工作の時間を楽しみにしている。しかし、自分の描きたいものやつくりたいものを想像し豊かに表現することができる児童もいる一方で、作品の主題や活動内容を理解し、自分のイメージや表現したいことを思い浮かべることができず戸惑ったり、自信をもてなかったりする児童もみられる。

そこで、手や指、体の感覚を働かせ、表現することや鑑賞することの楽しさを味わい、自分の表現に自信をもち、主体的に活動しながら、自分の感じたことや考えたことをもとにイメージを膨らませ、試行錯誤しながら自分だけの作品を表すことができるようになってほしいと考え、本題材を設定した。

2 指導の実際

(1) 題材名 「わたしだけの不思議な鳥 ～さわってまぜて きもちいい～」

く 絵に表す A表現 (1) イ、(2) イ、 B鑑賞、 共通事項 (1) ア、(1) イ)

①目標 ア 手や指で描くことを通して、触った感じや絵の具の跡の形、色の違いに気付くとともに、手や指などの動かす勢いや速さ、強さ、方向を変えるなどして線や形などを表す。

(知識及び技能)

イ 表したいことを見つけ、形や色を選んだり、いろいろな形や色を考えたりして、どのように表すか考えるとともに、「とろとろ絵の具」の面白さや楽しさ、形や色、表し方などについて、感じ取ったり考えたりして、自分の見方や感じ方を広げる。

(思考力、判断力、表現力等)

ウ「とろとろ絵の具」の気持ちよさを味わい、手や指につけて塗ったり描いたりする学習活動に楽しく取り組もうとするとともに、自分や友達の作品のよさや工夫点について考え、話すことを楽しもうとする。

(学びに向かう力、人間性等)

②指導計画

- | | |
|-----|--|
| 第1次 | 液体粘土と絵の具を混ぜて「とろとろ絵の具」をつくり、どんなことができるかを考え、いろいろな表現方法を試す。・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1時間 |
| 第2次 | 前時に試したことをもとに、「とろとろ絵の具」で「わたしだけの不思議な鳥」を考え、工夫して表す。・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2時間 |
| 第3次 | 友達と互いの作品を鑑賞し、よさや面白さ、表したいこと、いろいろな表し方について感じ取ったり考えたりし、見方や感じ方を広げる。・・・・・・・・・・ 1時間 |

3 結果と考察

(1) 主体的に取り組むための材料・題材の選定

児童が表現することに興味関心をもち、主体的に活動に参加できるような材料・題材を選定した。

①材料

水性で手触りのよい液体粘土と水彩絵の具とでつくった「とろとろ絵の具」を使い活動した。児童にとって、初めて使う材料であり、わくわく感の高まりがみられた。とろとろ絵具は、手や指など体の感覚を働かせて、失敗を恐れずダイナミックに活動したり、素材を工夫したりすることに適しており、いろいろな表し方を試していく中で、自分が感じたことや考えたことをもとに描きたいことを見つめることができた。紙はパステル造形紙を使用した。とろとろ絵具を直接手や指で塗っても耐久性があり、乾いたときにしっかり定着し、凹凸があっても剥がれない特徴がある。大きさは四つ切りにし、児童が手や指などの体を大きくダイナミックに描くことに適していた。

②題材

1年生にとって身近でイメージしやすいモチーフとして鳥を選定した。生活科で校庭探検をした際、鳥を見たり、声を聞いたりしたことがあり、児童にとって身近であったことと、6月の朝会で徳島にいる鳥の話の聞いたり、写真を見せてもらったりしていることで、興味関心をもって課題に取り組みやすいと考えた。また、鳥は毛が幾重にも生えており、その特徴から、描くときに毛の色をつくりかえたり、幾重にも色を塗り重ねたりしやすいと思った。このことにより、どの児童も鳥の色や形のイメージを膨らませ、集中して取り組む様子がみられた。

(2) 様々な表し方を生み出す指導の手立て

児童が自由にのびのびと指や手、体を使って描けるようになるためには、材料の扱い方を理解し、慣れることが重要であると考えた。まず、1時間、とろとろ絵の具の作り方や様々な表し方を試してみる時間をとった。自分で様々な色をつくることから「塗ったり、描いたりしたい」という気持ちを起こさせ、自由にのびのびと活動する時間となった。この活動の中で、表し方には「置く」、「垂らす」、「塗る」、「広げる」、「混ぜる」、「引っかく」、「重ねる」などたくさんの表し方があることに気付くことができた。また、児童の活動の中から出てきたものなどを全体に共有して意欲を高めたことで、本時の作品が仕上がった。

(3) 表したいことを見つけ表現の仕方を考える手立て

自分の描きたい鳥をイメージしやすくするために、2つのことを考えられるようにした。1つ目は、作品の背景となる紙の色を複数(12色)用意し、作品のイメージに合わせて選択できるようにした。その際に、鳥が空を飛ぶイメージだから水色、木々の葉っぱの中にいるイメージだから緑色や黄緑色、海の上を飛んでいるから青色、光の中を飛んでいるから黄色など、鳥のいる場所のイメージし選ぶように指導した。鳥の様子に合わせて、縦横どちらでも良いことも知らせた。2つ目はどんな鳥なのかである。「不思議な鳥」を思い浮かべ、イメージに向かって工夫しながら製作できるように、前時に見つけた工夫を初めに全体で確認した。線の描き方、色の重ね方、混ぜ方、乾いたらどう見えるかなどを確認し、イメージに合わせた工夫ができるように指導した。描くことを楽しみ、熱中している児童には共感の声をかけ、工夫している点を称賛することで、次々とアイデアを生み出し、作品を仕上げることができた。

(4) 自他の表現のよさや工夫点に気付き、認め合う場の設定

本授業ではグループで製作をするようにした。友達の活動が見えることで、互いに相談したり、アドバイスしたりして、「こんなことがしたい」という感情が高まり、発想が広がった。また、製作の途中、自分や友達の作品を鑑賞する時間をとったことで、それぞれの思いや工夫を感じとりながらイメージを具現化することができた。製作後は、作品に題名をつけ、場所(空・森・木・海・家)、鳥の様子(飛んでいる・休んでいる・餌を食べている)、工夫点(色・形・重ね方・混ぜ方)を振り返り、感想カードに書かせ鑑賞会をした。作品についてグループで紹介し合ったあと、全体で鑑賞した。自分の感じたことや考えたことを表現し、満足そうな顔や、作品のよさを認めてもらえて嬉しそうな顔がみられ、自信につながる良い時間となった。

4 おわりに

実践を通して、普段自信がもてない児童も感覚や体全体を使って楽しんで表現する姿がみられた。児童が自分のイメージを広げ、自信をもって活動するためには、教師が題材や材料、指導方法を工夫することが大切だということを実感した。これからも、児童一人一人が自分の思いを大切に表現し、のびのびと主体的に活動に取り組めるような実践を続けていきたい。